

これからの童話材の取り扱ひ

東京保育學校 内山 憲 尙

一 新しい歴史

約一ヶ年間授業の禁止を受けつゝいた國史が再開を許可され
ると共に「新しい國史教科書」が出来上つた。今度の教科書
中一番變つたことは神話的なものを全部削除せられて、神武
天皇以前は石器時代として、考古學的な取り扱ひをされ、國
語に於ける神話的教材も取り入れられなくなつて、從來、國
語や歴史で聞かされていた神話は學校に於ける正規の授業か
らは除かれたのである。

歴史を神話へ結びつかせて、神話そのものを歴史的に取り
扱つて來た從來のやり方は、歴史學的には間違つていたこと
は事實であるが、「神話を兒童に與えてはならないものであ
る」と云う様な考えを持つ教育者があつたとするなれば、そ
れは大なる間違ひであると云うことを知らなければならな
い。

各民族にはそれぞれ、民族の説話があり、神話があるので
あつて、「神話は民族の夢」であると云われている。

教科書に於て歴史として取り扱われなくなつた神話は民
族の文藝として、古代の藝術として、與えなければならな
い。

ことに幼兒に對しては、「談話」の一つの分野として、童話
の一種として語る時間を出来るだけ澤山にとることが必要で
ある。

「今日の天子様の御祖先」としての神々ではなく、「日本の
昔においてになつた神様」として取り扱わなければならない
ことは勿論であり、歴史と離れた一個の物語りとしての「天
の岩屋」「八岐のおろち」「天孫」「少彦名のみこと」「二つ
の玉」「國引き」であらねばならぬ。

二 日本童話の再検討

神話の正しい取り扱ひと共に、日本童話即ち傳承童話の再
検討が必要である。但し再検討と云う意味は日本童話の中で
桃太郎が軍國主義の童話であり、さるとかにやかちかち山
が仇討ち童話であるから話してはいけないと云う様な消極的

な考え方ではない、今まで傳承童話でさえも戦時中、ジャーナリズムの手によつて歪められていたために一般に間違われて解釋されていたのである。その間違ひを正して、昔の正しい形に返すための再検討である、即ち、興えんがための積極的再検討である。

桃太郎の話が戦争中は可成り悪用されて、侵略的な意味に用いられて來ていた。例えばある本屋から出した單行本には桃太郎が、南洋へ遠征して、寶物の代りに、麻やゴム等の産物を分捕りして來たり、帝國劇場で演じた歌劇團の桃太郎では、大猿雉が鐵砲や機關銃を持つ一團場し、桃太郎が「日本一」の旗の代りに「撃ちてしまん」の旗を背にさして登場したりしたのである、即ち桃太郎は全く思いがけない、あさましい身代りに私用された譯であつた。

元來桃太郎の話は、正義と進取と勇氣と協同と寛大を表象した童話であつて、軍國的な侵略的な意味は持つていないのである。桃から生れたと云う、桃は古から邪氣を拂うものとして取り扱われ、桃太郎が壯年の勇士としてではなく、少年のまゝで出發し、鬼が島へ征くに際しても何等の目的も持たず單に邪惡なものを伐つと云う正義觀に出發し、その家來の大猿雉は三匹とも平和的動物である。もしも桃太郎が軍國的な侵略的な意味を多分に持つならば猛獸を引卒して行つたにちがいない。

印度の桃太郎と云われているラマヤナは鬼が島（セイロン島）遠征するに似て熊猿の一族と鷲の案内によつて出

かけて姫を助け寶物を分捕つて歸つており、イタリヤの同型の童話、ケエザリノも龍の島（シシリイ島）へ出かけるに際し、熊と獅子との猛獸を家來として、姫を助けに行つてゐるのである。

桃太郎はどこを押して軍國的であると云うことが出来るか、保母さんたちの中には、「桃太郎の話は遠慮したら」と云う人があるが、正しい日本昔噺の形で話しさえすれば決して遠慮をすることは要らない、どんどん話して貰いたいと考える。かちかち山、おるとかにに於ては成立當時は、その時代の道徳が仇討ちを美德とした時代であるから仇討ち的色彩が濃つたが現行のもの——國譯讀本に扱われている形式のもの——は徳川末期の「雛遷宇計木」又は「童話長篇」からとつたもので、もう仇討ちの色彩はその影を見ることが出来ないものになつてゐる。そのまま興えて決して差支えはないのである。

三 外國の話を澤山に

戦時中は敵國の英米の音楽は禁止せられ、英語をさえ使用を止められたので、従つて、外國の話はなる可く遠慮する方がいと考えられたのであつたが、これは大變なる間違ひで兒童文學の上には戦時もなければ國境もない、一人間を作る上によい話であるならば洋の東西を問わずこれを幼児に興えてよいのである。

敗戰國の話だからと云つて獨逸の童話を遠慮することはな

い、グリムの話結構、大いに話す可きである。

今まで外國の話と云うとイソップとグリムのみに限られていた様であるが、今後は出来るだけ廣く、各國のいゝ話を——ことに新しい話でよいものがあるからそれを幼兒の話に取りあげて大いに廣く話をして貰いたい。

アンデルゼンのものは難しいと云う聲を聞くが、幼兒たちが話を聴く耳さえ出来ればアンデルゼンのものでも充分に聞くことが出来るのである。

従來、童話は月一回か二回位しか與えられていないので、話を聞く態度や、聴く耳が作られていない、今後の保育に於ては、話を出来るだけ澤山に聞かせて、靜かに話を味わい充分に話を聴く耳を養成してやる必要があるである。

唱歌や遊戯が毎日與えられていると同様、童話も幼兒の生活として、毎日與えられて決して悪いことはない、否、むしろ、毎日與えて結構である。

四 童話の利用

童話の使命は、生活の擴充、情操の涵養、想像力の善化、同情心の養成であつて、話の内容から教訓を與えようとしたり、話によつて矯正をなさんとする様な、話を道具としての利用は童話の目的を破壊するものである。

戦時中桃太郎の話が競争目的遂行のために利用されたことは間違ひであると云つたが、更に私たちは大正末から昭和初年に於て、童話がある託兒所に於て、或は共產黨の人たち

によつて利用され、さるとかにの話が猿が資本家で、蟹（無産者）の丹精して作つた柿の實を擄取して、蟹を殺した、蟹たちは仲間の無産者協同によつて、仇を討つたと云うが如き又は金太郎が山の中で無産者たちを家來にして、彼等を使役し、勞働力を奪つたと云うが如き話がなされたと云うことは話の悪用であり、歪められたことになるのである。童話にそんなイデオロギーを盛り込んでほならない、どこまでも正しく、童心の中から芽生えた白玉の如き、美しく明るいものを與えることを忘れてはならない。

五

「子供が亂暴になつた！」

「子供が粗雑になつた……落ちつきがなくなつた！」

と云う言葉は全國の幼稚園、國民學校の先生たちから聞く聲である。實際戦前に比べて終戦後の幼兒たちは見違える程ひどく變つて仕舞つた。

無理もないことであるかもしれない——戦争中の數年間は空襲や防空演習や、待避によつて毎日の生活は、死に直面させられる恐怖を與えられ、乏しい物質的生活に我慢させられ「欲しがりません勝つまでは」と歌にまで歌わされて限られた生活を餘儀なくさせられて來たのである。

美しい夢

たのしい子供らしさ

のんびりとした生活

は彼等の生活から遠く離されて仕舞つたのであつた。

終戦から今日までは物質缺乏から生じた成人のひどい生活をそのまゝ見せられ聞かされ影響せられて、幼児の生活は更に落ちつきと潤いとをなくして仕舞つた。

これからの幼児の有様がこれでよいのであろうか。何時までこんな状態のまゝに放任して置いてよいのであろうか。一日も早く、子供らしさを取りもどして、潤いとよるこびとたのしい生活にしてやらなければならぬ。

「これからの子供にどんな童話を與えたらよろしいでせう」と聞かされることが多いが、

「戦前のものなら、どんなものでもよろしく」と答えて間違ひはない様である。

童話によつてものを教えようとするところに間違ひがあるのである。童話を利用する可きものではない。もしも戦争中童話が、軍國主義的精神の育成に役立つていたとしたらそれは決して正しい童話ではなかつた筈である、本質的な童話からは縁遠いものであつたと言ふことが出来る。

桃太郎の話が、ある軍行本には東洋へ征伐に行く様に書きかえられたり、帝劇である歌劇團の演じたのなど犬猿雉が鐵砲を持つて出場し桃太郎の「日本一」の旗の代りに「撃ちてしまん」の旗を持つて登場させた様なのは全く童話の冒瀆であると云ふことが出来る。こんなことから桃太郎の話が軍國主義を強調したものであると考えられる様になつたのであろうが、桃太郎は正義と勇氣を中心とした話であつて決して

軍國主義鼓吹の童話ではない。

軍國主義のために利用されて、侵略主義者と見られて桃太郎さんもさぞかし迷惑していることだろう。

六

これからの保育に必要なものは

平和の愛好

美しい同情心

明朗なる性情

たくましい生活

大きい理想

である。

童話に於ては侵略者や平和の攪亂者は必ず罰せられ亡びられることが定石になつてゐる。童話の世界は常に平和が最後の勝利を得るものである。

童話には詩的正義がある、即ち善人は必ず榮え、悪人は亡びると云う藝術的正義観である。幼児は話中の可哀そうなものの弱者に同情をして、悪人が罪せられ、制裁を受けることをよろこぶのである。

今後の保育に明朗性の必要なることは第一號に倉橋先生もお書きになつてゐたが、童話はこの明朗な性情を養う上には非常に役立つものである。

童話の中へは、老若男女、強い者、弱い者、正直者、不正直者、賢者、愚者、王様、乞食、あらゆる人物が現われて、

いろいろな事件が起り、それが完全に解決するものである。即ち人生のあらゆる姿を現わしたものであつて、人生の縮圖と云われ、人間生活の横断面とも考えられる。

童話は民族の夢であり、兒童の理想である。彼等の魂を理想の樂園で自由に遊ばせること、のびのびと子供らしさ——童心の世界で——に没らしめることは童話の常道である。

以上捉われざる正しい童話こそは、今後の保育の上でなくてはならない教材であることを忘れてはならない。従來の保育に於ては保育項目偏重が目立つて遊戯がその大半の時間をとつていて、談話は申し譯的に附け加えられていたのである。アメリカ其他各國の保育に於て談話が如何に、その使命の重大さを認められ、時間的に多く取り入れられているかと云うことを見る時、今後の我が國の保育に談話の取持つ部面の多大であり、保姆さんたちが、談話についての正しい認識と、正しい修練が必要であることを痛感する次第である。

○親しい會話……

「どうなまつたの。泣いたりして……」

「だつて」

「また竹ちゃんにいちめられたの」

「いえ。そうじゃないの」

「どうしたのさ」

「あのね。竹ちゃんが、お池の水をとりたいつてきかないで、すべるといけないつて止めてもきかないで、いつものように、わたしの手をふり切つて、かけ出していつたの。そうして池のそばで、すべつて池に落ちそうになつたの。わたし、びつくりして、とめようとして、わたしの方が、池へどびこんで仕舞つたの。淺いから何んでもないけれど、靴もスカートも、ぐしょぐしょになつたの。それで、水のかげらを渡してやるうとしたら、竹ちゃん、いきなり、わたしに抱きついて、それから靴をはきかえてるまでも、少しもそばを離れないじゃないの。お歸りの時まで、ずうつと。かわいじやないの」

「そお」

「お歸りの時おね、いくどもく、わたしをふりむいて、にこくしながらね。かわいいわ。その後姿を見ながら、わたし、なんだか涙が出ちやつたの。かわいいわ」